

補助動詞の多用と待遇意識

～年齢差に注目して～

The frequent use of subsidiary verbs and politeness sensitivity - Focusing on age gap -

山本 裕子

Hiroko Yamamoto

Abstract

This paper is based on a survey conducted on both university students and adults, in which they are asked to choose phrases they prefer to use in occasions related to customer service, and to choose how these phrases would be perceived in terms of specific impressions such as ‘friendly’, and the degree to which it is perceived as such. The results showed that the tendency to choose phrases are different according to the age. Older people tend to choose honorific phrases when possible and choose phrases which possess polite impressions. Younger people do not depend on honorific phrases and use subsidiary verbs in many situations. They think ‘friendly’, ‘cheerful’ and ‘gentle’ are important in addition to ‘polite’. There is a clear shift in politeness sensitivity, and as such, subsidiary verbs may result in being used as a kind of honorific phrase in the future.

1. はじめに

近年、敬語を含む待遇表現が、上下による使い分けから親疎による使い分けへと変化していることが指摘されている。井上（2017）は、「話し手と聞き手の人間関係により配慮するように変化」しており、それには「聞き手に配慮する言葉を丁寧にしよという心理」があると述べている。そして、敬語使用に頼るよりも談話全体で相手との関係を調整する傾向が見られるとし、この変化の反映した具体的な言語現象の一つとして、井上他（2012）では国立国語研究所の長期的な調査で、例えば道を教える場面において「交差点を渡ってもらって・・・」のように、以前は用いられなかった授受補助動詞の「もらう」「いただく」が多く見られるようになっていたことを挙げている。敬語で距離をおく形で対人的な配慮を表していたものから、「もらう」「いただく」の使用により、心理的な距離を縮める方向で対人的な配慮を表すように変化が見られるということである。

一方で、筆者は「いただく」「もらう」に限らず、「野菜を刻んでいきます」や「これも入れちゃいましょう」といった補助動詞を含んだ表現が、接客場面の、特に手順を説明するような

場面でよく用いられることに注目している。これまでに、これらの表現がどのように捉えられているか、大学生を対象に質問紙調査をおこなったところ、大学生は補助動詞を好感度の高い表現と捉えており、積極的に用いていることが示された。本稿では、社会人を対象に同様の調査をおこない、その結果を大学生の結果と比較して、待遇意識の変化の観点から論じる。

2. 研究の背景

はじめに述べたように待遇的配慮が上下関係重視ではなく、親疎関係が重視される傾向にあることには様々な立場から多くの指摘がある（井上他 2012、井上 2015・2017、2014 他）。しかし、待遇表現の変化の方向性が論じられる際、「敬語」は取り上げられてきたが、「補助動詞」は待遇表現としては特に注目されてはこなかった。

補助動詞は多様な意味・用法を持ち、また自然な日本語において使用頻度の高いものである。これまで補助動詞の多様な意味・用法を記述する研究は多くある。また使用頻度の高さから、日本語としての自然さといかに関わっているかという指摘も多い（近藤他 2010、池上・守屋 2009、水谷 2015 他）。しかし待遇的な観点から補助動詞を捉えた研究は多くない。はじめに挙げた井上（2017）のように、授受補助動詞がその性質から対人的配慮と結びつけられることはある。しかし、井上の論は敬語の使い方の変化に主眼をおくものである。「もらう」「いただく」の多用も謙譲語の不使用と関係付けて捉えられており、補助動詞という枠組みで捉えたものではない。

その中で、筆者は補助動詞使用の背後にどのような意識があるのか、大学生を対象に意識調査をおこなった（山本他 2013、山本 2015）。この調査は接客場面での補助動詞の使用を特に取り上げたものではないが、補助動詞を用いない場合と比べ、補助動詞を用いると「柔らかい」、「優しい」等、「感じの良さ」が感じられる場合があることを実証的に示した。

また、接客場面での補助動詞の新奇な用法に言及したものとしては水谷（2015）がある。水谷は、接客場面に見られる補助動詞の新しい用法として「シャンプーしていきます」について、「客と寄り添う感じがあり、熱意をこめて洗ってくれそうな感じがする」と述べている。そしてこうした補助動詞の使用について、「『単なる接客用語』にしても、好感がもてる表現としてこれからの待遇表現の一角を占めるようになるのではなかろうか（p.42）」と指摘している。

これらを踏まえ、筆者は、接客場面をはじめとする補助動詞の多用は、補助動詞の用法の変化として捉えるのに留まらず、待遇表現の変化の中に位置付けて捉えられるのではないかと考え、山本（2016）で大学生を対象に調査を実施した。一般的に話し手と聞き手が親しい関係であれば、どのような表現を用いても丁寧さの点で問題にはならないが、接客場面では「失礼」な表現は避けられる。つまり接客場面では、いわゆる「新しい用法」は用いられにくく、丁寧さに関してより規範的な結果が得られるはずであるため、待遇意識がより明確になると考え、山本（2016）では接客場面を調査場面に設定した。

大学生を対象に「いただく」「もらう」だけでなく、「野菜を刻んでいきます」や「これも入

「れちゃいましょう」等の補助動詞を含んだ表現がどのように捉えられているか、質問紙調査をおこなった結果、これらはいわゆる「敬語」と直接的には結びつく表現ではないが、大学生は「丁寧」で「優しい」「柔らかい」「親しみのある」表現と捉えており、対人的に肯定的な効果のある表現として積極的に用いていることが示された。つまり、これらの補助動詞の使用も対話の相手との心理的な距離を縮める、待遇表現の変化の方向性に合致したものと考えられる。この結果が妥当であるなら、大学生よりも年長の世代では、補助動詞を学生ほどは多用せず、接客場面での表現選択において異なる動機付けを有していることが考えられる。では、年長者はどんな表現を用いているか。また背後には、接客場面での表現の選択に当たって、どんな動機付けがあるのだろうか。

以上を踏まえ、本稿での課題を以下の2点とする。

課題1：年齢によって表現の選択傾向には相違があるか。あるとしたらどのようなものか。

課題2：またその背後にはどのような待遇意識があるか。

これらの検討を通して、補助動詞の多用と待遇意識の変化の関係を考察したい。

3. 調査

3.1. 概要

本稿では、社会人を対象に調査をおこない、山本（2016）の大学生の結果と比較することで、前章で述べた課題の検討をする。調査の概要は以下の通りである。

調査対象者 大学生 100名²⁾

社会人若年層（20代後半～30代前半）16名：以下「若年層」とする

社会人中年層（40代後半～50代前半）29名：以下「中年層」とする

調査方法 質問紙調査³⁾

調査時期 大学生 2015年4月～6月

社会人若年層 2016年10月～11月

社会人中年層 2016年12月～2017年1月

3.2. 調査内容

よく耳にする接客場面として3つの場面を設定し、4コママンガで示した。そしてこのマンガを用いて次の2つの調査を実施した。場面と選択肢を表1に、実際に用いた調査用マンガを図1に示す。

調査1) 表現選択調査：接客場面において、どの程度補助動詞表現を用いるかを調査することを目的とする。場면을4コママンガで示し、マンガの中の1コマあるいは2コマのセリフに計5箇所、選択肢を設けた。この選択肢から、その場面にふさわしい、印象がよいと感じる表現を選択してもらった。選択肢は上下方向に基づく待遇表現の代表的な形式として a.敬語、敬

語に対立する形式として b.動詞のみ（以下略称は V とする）、また本稿で取り上げる形式である c.補助動詞（以下略称は V-v とする）の3つとした⁴⁾。ただし敬語は文脈的に可能な場面のみ選択肢として設けた。

表1 場面設定

場面	選択肢	a. 動詞のみ	b. 補助動詞	c. 敬語
1 ガソリンスタンドでの道教え		行く	行ってもら	行かれる
2 美容院	-1 ドライヤー	当てる	当ててあげる	
	-2 前髪の分け目	しましうか	しときましうか	いたしましうか
3 料理番組	-1 ピザの台	作ります	作っていきます	
	-2 具をのせる	のせましう	のせちやいましう	



図1 設定場面

調査2) 印象評価調査：調査1) で選択した表現についてどんな印象がするか、事前調査で得られたキーワード（以下「印象語」とする）として「丁寧」「親しい」「明るい」「優しい」「柔らかい」「楽しい」を提示し、どの程度当てはまるかを、図2のように選択肢のあるコマの横に回答欄を設け、それぞれ4段階で評価してもらった⁵⁾。

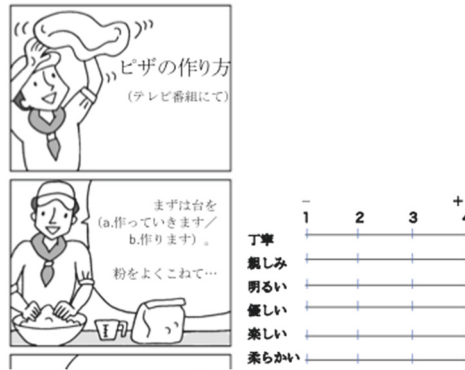


図2 印象評価調査の回答欄

ここで、各場面で選択肢とした補助動詞の用法について述べる。場面1、2、3の補助動詞の用法は、従来の意味用法の説明では十分には説明できない、いわゆる「新しい用法」である。どの場面でも補助動詞を用いない表現（選択肢の「a.動詞のみ」に相当する）も可能であり、補助動詞は意味的に必須なわけではない。

場面1「(右に行って) もらう」は、道を尋ねた側ではなく、道を教える側が受惠表現「もらう」を用いている点で、「もらう」の典型的な用法とは異なっている。場面2-1の「(風を当てて) あげる」も、「ドライヤーの風を当てる」ことが誰(何)に対して恩恵的であるのか明瞭ではないにもかかわらず受惠表現「あげる」を用いている点で典型的な用法とは異なっている。

場面2-2の補助動詞「おく(ここでは縮約形「とく」)」は、「ある目的のためにあらかじめある行為をおこなう(庵他 2000:64)」ことを表すとされている。場面2-2の補助動詞「おく(ここでは縮約形「とく」)」は、典型的には、ある目的のためにあらかじめある行為をおこなう準備的行為を表す(庵他 2000:64)。行為の目的が明確でない場合、準備というよりも「後のことを意識して」という程度になる。例えば「試験のために勉強しておく」では目的が明確であり、「勉強する」ことはいかにも準備的であるが、「休めるときに休んでおく」では「休んだ方が後のために良い」というように「後のことを意識して」という程度である。また、「こういうときは黙っておく」では目的意識はさらに希薄で、当面の一時的措置を表すと考えられる。場面2-2の「おく」は、前髪の分け目を「右にするか、左にするか」を客に問う場面で用いられている。明確な目的があるわけではなく、当面の措置と取れる。当面の措置という意味合いから「押しつけがましくない」とも「不十分」とも取れるため、「おく」によって生じる含意を好意的に受け取るか否かは人によって異なる可能性がある。

場面3-1では、手順を述べるものとして、補助動詞「いく」が用いられている。これは近年よく耳にする使い方であるが、補助動詞「いく」の時間的な用法⁹⁾の典型的な意味とは合わない。「いく」は基準時以降への変化の進展・動作の継続(近藤・姫野 2012: 50-51)を表すとされるが、ここでは「(ピザの台を作って) いく」は、手順を列挙する中で、これからおこなう動作の進行を表しており、やはり典型的な用法とはずれがある。また、場面3-2の「しまう

(ここでは縮約形「ちゃう」)」は、一般に「完了」を表すとされるが、この場面の「具を載せちゃいましょう」は「いろいろな具を全部載せる」という完了時点と同時に、「通常よりも多くの種類の具を思い切って載せる」という意外な事態の出現時点に注目しているようにも感じられ、単なる「完了」の意味には留まらないように思われる。

以上に述べたように、ここで選択肢にした補助動詞の用法は、いずれも典型的な用法とは異なる新しい用法である。もとより、補助動詞を用いなくても意味的に大きな支障がない場面もあり、規範意識の強まる接客場面では用いにくいと考えられる。本調査によって、待遇意識がより鮮明になるだろう。

4. 結果

4.1. 調査1 (表現選択調査) の結果

はじめに調査1の結果を年齢層別に順に述べる。表2に調査1の結果をまとめて示す。ここでは、まず敬語を選択肢に含む場面か否かを手がかりとする。敬語を選択肢に含む場面である場面1、場面2-2と、敬語を選択肢に含まない場面2-1、3-1、3-2を区別して、年齢層ごとに回答の傾向を見る。表2に選択率のもっとも高い形式を色付けして示した。

5つの場面の各々において、選択の仕方に差が見られるかどうかをjs-STAR[®]を用いて、敬語が選択肢にある場合にはカイ二乗検定を、敬語が選択肢にない場合には直接確率計算をおこなった。

表2 年齢層別表現選択調査の結果

場面		選択肢	a. V	b. V-v	c. 敬語	NA
大学生	1GSでの道教え**		12(12.0%)	37(37.0%)	50(50.0%)	1(1.0%)
	2美容院 -1**	ドライヤー	33(33.0%)	66(66.0%)		1(1.0%)
	美容院 -2**	前髪	56(56.0%)	18(18.0%)	25(25.0%)	1(1.0%)
	3料理番組-1**	ピザの台	14(14.0%)	84(84.0%)		1(1.0%)
	料理番組-2**	具をのせる	38(38.0%)	60(60.0%)		2(2.0%)
社会人若年層	1GSでの道教え		4(25.0%)	4(25.0%)	8(50.0%)	
	2美容院 -1	ドライヤー	7(43.8%)	9(56.3%)		
	美容院 -2	前髪	7(43.8%)	2(12.5%)	7(43.8%)	
	3料理番組-1*	ピザの台	3(18.8%)	13(81.3%)		
	料理番組-2	具をのせる	6(37.5%)	10(62.5%)		
社会人中年層	1GSでの道教え**		4(13.8%)	4(13.8%)	21(72.4%)	
	2美容院 -1	ドライヤー	14(48.3%)	14(48.3%)		1(3.4%)
	美容院 -2*	前髪	10(34.5%)	3(10.3%)	15(51.7%)	1(3.4%)
	3料理番組-1	ピザの台	17(58.6%)	12(41.4%)		
	料理番組-2	具をのせる	12(41.4%)	16(55.2%)		1(3.4%)

**は1%水準で有意差がある場面 *は5%水準で有意差がある場面

大学生はどの場面も選択傾向に有意な差が見られた。残差分析をしたところ、敬語が選択肢にある場合（場面1、場面2-2）、場面1では「動詞のみ」の選択が有意に少ない⁹⁾が、場面2-2では逆に「動詞のみ」を選択する回答者が有意に多く¹⁰⁾、選択傾向は一定ではないが、どちらの場面も敬語の選択率が高い訳ではない。敬語が選択肢にない場合（場面2-1、場面3-1、3-2）は、どの場面でも補助動詞の選択率が有意に高かった¹¹⁾。

社会人若年層は、敬語が選択肢にある場合、場面1は敬語の選択率が多く、場面2-2は敬語と「動詞のみ」が同率となっており、敬語を選択する回答者が多いようだが統計的には有意な差が認められなかった¹²⁾。また敬語が選択肢にない場合は、大学生と同様に補助動詞の選択率が高い。しかし、場面2-1、3-2は有意な差はなく、場面3-1のみ統計的に有意な差が見られた¹³⁾。

社会人中年層は、敬語が選択肢にある場合、どちらの場面も敬語の選択率が有意に高い¹⁴⁾。一方、敬語が選択肢にない場合は、場面によって選択率の高い形式は異なるが、いずれも統計的に有意な違いは認められなかった¹⁵⁾。

以上の結果から、年齢が高い層では敬語が使える場合は敬語を選択するが、年齢の低い層では敬語を選択する傾向は低くなると言えそうである。

次に、場面ごとに選択傾向に年代層による相違があるかどうかを見る。

表3 場面別表現選択調査の結果

場面	選択肢	a. V	b. V-v	c. 敬語	NA
場面 1	大学生(N=100)	12(12.0%)	37(37.0%)	50(50.0%)	1(1.0%)
	社会人若年層(N=16)	4(25.0%)	4(25.0%)	8(50.0%)	
	社会人中年層(N=29)	4(13.8%)	4(13.8%)	21(72.4%)	
場面 2-1	大学生(N=100)	33(33.0%)	66(66.0%)		1(1.0%)
	社会人若年層(N=16)	7(43.8%)	9(56.3%)		
	社会人中年層(N=29)	14(48.3%)	14(48.3%)		1(3.4%)
場面 2-2*	大学生(N=100)	56(56.0%)	18(18.0%)	25(25.0%)	1(1.0%)
	社会人若年層(N=16)	7(43.8%)	2(12.5%)	7(43.8%)	
	社会人中年層(N=29)	10(34.5%)	3(10.3%)	15(51.7%)	1(3.4%)
場面 3-1 **	大学生(N=100)	14(14.0%)	84(84.0%)		1(1.0%)
	社会人若年層(N=16)	3(18.8%)	13(81.3%)		
	社会人中年層(N=29)	17(58.6%)	12(41.4%)		
場面 3-2	大学生(N=100)	38(38.0%)	60(60.0%)		1(1.0%)
	社会人若年層(N=16)	6(37.5%)	10(62.5%)		
	社会人中年層(N=29)	12(41.4%)	16(55.2%)		1(3.4%)

* $\chi^2(4) = 8.923, .05 < p < .10$ ** $\chi^2(2) = 24.522, p < .01$

表3に示したように、場面1、2-1、3-2は年齢による選択傾向の相違に有意な相違はない。違いが見られたのは、場面2-2と場面3-1である。場面2-2はカイ二乗検定をおこなったところ有意な違いがあったため、残差分析をした結果、大学生は「動詞のみ」が有意に多く、社会人中年層には敬語が有意に多かった。また場面3-1では、大学生には補助動詞が有意に多く、社会人中年層は「動詞のみ」と補助動詞が同程度でどちらかに偏ることがなかった。このように、統計的な有意差は年齢が離れているところで見られる。そこで、大学生と中年層だけを取り出して比較したところ、場面1も有意な違いが見られた($\chi^2(2) = 5.885, .05 < p < .10$)。残差分析の結果、大学生は補助動詞が有意に多く、社会人中年層は敬語が有意に多かった。

このように、全ての場面ではないが、大学生と社会人中年層には相違があり、中年層は敬語を選択するが、大学生は補助動詞を選択する場面が多い傾向があった。なお、年齢層による有意な差のない場面2-1、3-2については後ほど検討することとする。

最後に、敬語が選択肢にあるかどうかに関わらず、どの表現形式が好まれているかに注目すると、表4に示したように大学生および社会人若年層は5つのうち3つの場面で補助動詞の選択率が高い。また、補助動詞の選択率を年齢層で比較すると、大学生のほうが社会人若年層よりも高い選択率となっている。よって、年齢が若い層でより補助動詞が好まれる傾向がある。

表 4 補助動詞選択率

	大学生	社会人若年層	社会人中年層
場面 1	37.0%	25.0%	13.8%
場面 2-1	66.0%	56.3%	48.3%
場面 2-2	18.0%	12.5%	10.3%
場面 3-1	84.0%	81.3%	41.4%
場面 3-2	60.0%	62.5%	55.2%

以上のことから、課題 1 「年齢によって表現の選択傾向には相違があるか。相違があるとしたらどのようなものか」に対しては、年齢によって表現の選択傾向には相違があり、年齢が高いほど敬語を使用可能なら敬語を用いるが、年齢の低い層では必ずしも敬語を重用しておらず、補助動詞を用いる割合も高い傾向があると言える。

4.2. 表現の印象（調査 2 の結果）

次に、それぞれの表現をどのように捉えているか、調査 2 の印象評価調査の結果を示す。調査 2 は図 2 に示したように、選択肢のあるコマの横に回答欄を設けており、一人の回答者が、複数の表現を評価しているわけではない。回答者は、例えば場面 1 において、「動詞のみ」(行く) は「丁寧さ」は 3、補助動詞 (行ってもらう) の「丁寧さ」は 3、敬語 (行かれる) の「丁寧さ」は 4、のように全ての選択肢を評価しているわけではなく、自分の選択した表現に対して評価している。したがって表現間の評価点を比較することに意味はなく、1つの表現内で印象語間の評価点を比較するべきものとする。以上を踏まえ、ここでは表 5、表 6、表 7 に選択した表現ごとに、それぞれの表現に対する評価をまとめた。

表 5 評価点の高い印象語（大学生） (N=100)

	動詞のみ							補助動詞							敬語						
	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
大学生	1	2.50	3.08	3.17	2.92	2.75	2.83	1	3.23	3.23	3.23	3.17	2.71	3.17	場面1	3.50	2.90	3.02	3.27	2.60	2.90
	2_1	2.41	3.15	2.97	2.94	2.88	3.00	2_1	3.15	3.29	3.27	3.45	2.85	3.24							
	2_2	2.88	3.23	3.06	3.06	2.78	2.98	2_2	2.94	3.39	3.17	3.22	2.89	3.11	2_2	3.52	2.60	2.60	2.96	2.40	2.60
	3_1	3.00	2.79	2.93	2.93	2.93	2.64	3_1	3.26	3.19	3.22	3.14	3.13	3.08							
	3_2	3.29	2.79	2.89	2.87	2.74	2.89	3_2	2.23	3.73	3.67	3.18	3.67	3.16							

表 6 評価点の高い印象語（社会人若年層） (N=16)

	動詞のみ							補助動詞							敬語						
	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
社会人若年層	1	2.50	3.00	3.00	2.75	2.50	3.00	1	3.00	3.50	3.50	3.75	2.75	3.25	1.00	3.57	2.83	3.00	3.33	2.50	2.83
	2_1	2.17	3.00	3.00	2.83	2.83	2.29	2_1	3.25	3.75	3.50	3.63	3.00	3.63							
	2_2	2.50	3.43	3.00	3.33	2.83	3.33	2_2	1.50	3.50	3.00	2.00	2.50	3.00	2_2	4.00	2.67	2.50	3.17	2.17	2.83
	3_1	2.67	2.67	2.67	2.67	2.33	2.67	3_1	3.08	3.45	3.27	3.27	3.00	2.91							
	3_2	3.00	2.80	2.80	3.00	2.60	2.60	3_2	2.00	4.00	3.69	3.00	4.00	3.44							

表7 評価点の高い印象語（社会人中年層）（N=29）

社会人 中年層	動詞のみ							補助動詞							敬語						
	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
	1	3.20	2.67	2.93	2.40	2.67	2.40	1	3.20	3.20	3.60	3.20	3.20	3.73	1	3.75	2.95	2.84	3.16	2.51	2.87
	2_1	2.72	2.98	2.88	2.81	2.56	2.80	2_1	3.40	3.20	3.00	3.35	2.70	3.25							
	2_2	2.90	3.53	3.00	3.00	2.70	3.10	2_2	2.93	4.00	3.20	2.93	3.20	2.93	2_2	3.81	2.93	2.72	2.99	2.61	2.77
	3_1	3.10	2.56	2.51	2.51	2.51	2.72	3_1	3.32	3.32	3.13	3.27	3.27	3.27							
	3_2	3.42	2.98	2.84	2.98	2.69	3.13	3_2	2.51	3.95	3.74	2.97	3.73	3.14							

まず、表現ごとにどのような捉え方がされているかについて傾向を見る。表中では、場面ごとに一つの表現に対する評価平均点の相対的に高い印象語を網掛けで示した。どの年齢層でも、敬語は「丁寧」の評価点が高い点で一致している。また、「動詞のみ」は場面によって異なるが、「親しみ」と「丁寧」の2つの印象語の評価点が相対的に高い。補助動詞はどの年代にも多様な捉え方がされている。例えば、大学生は、場面1では補助動詞を「丁寧」で「親しみ」があり、「明るい」と捉えているが、場面2-1では「優しく」「親しみ」があり、「明るく」「柔らかい」ものと捉えている。社会人中年層は、場面1では「柔らかくて」「明るい」ものと捉えており、場面2-1では「丁寧」で「優しい」ものと捉えている。このように、場面によって評価点の高い印象語は異なり、年齢層によっても異なる。特に大学生は、多くの印象語で評価点が高くなっており、補助動詞の捉え方が多様である。これは、補助動詞がもともと多様な性質であることも影響していると考えられる。例えば、「食べる」を例に挙げると、「食べる」のようにそのまま動詞のみで表現するものと、「召し上がる」という敬語、そして「食べてもらう」「食べてあげる」「食べてしまう」等の補助動詞形式がある。この場合、「食べる」と敬語形「召し上がる」の相違点は丁寧差の有無のみであるが、補助動詞の諸形式はそれぞれ意味が異なる。この多様な意味が、様々な印象を生むのに関わっていると考えられる。ただし本稿は補助動詞の意味の広がりのプロセス1つ1つを追究することが目的ではないため、多様な印象をもたらすのは、元の意味に多様な性質があることが影響している可能性があるという点を指摘するのみとする。

次に、表現の選択傾向との関連を検討する。表8にまとめて示す。表8では、選択した回答者の多かった選択肢を取り出し、その表現の印象評価において相対的にポイントの高い印象語を色付けして示した。

表8 選択率の高い表現とその印象

	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
	大学生	1 敬語	3.50	2.90	3.02	3.27	2.60
	2_1 Vv	3.15	3.29	3.27	3.45	2.85	3.24
	2_2 V	2.88	3.23	3.06	3.06	2.78	2.98
	3_1 Vv	3.26	3.19	3.22	3.14	3.13	3.08
	3_2 Vv	2.23	3.73	3.67	3.18	3.67	3.16
社会人若年層	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
	1 敬語	3.57	2.83	3.00	3.33	2.50	2.83
	2_1 Vv	3.25	3.75	3.50	3.63	3.00	3.63
	2_2 V	2.50	3.43	3.00	3.33	2.83	3.33
	2_2 敬語	4.00	2.67	2.50	3.17	2.17	2.83
	3_1 Vv	3.08	3.45	3.27	3.27	3.00	2.91
	3_2 Vv	2.00	4.00	3.89	3.00	4.00	3.44
社会人中年層	場面	丁寧	親しみ	明るい	優しい	楽しい	柔らかい
	1 敬語	3.75	2.95	2.84	3.16	2.51	2.87
	2_1 Vv	3.40	3.20	3.00	3.35	2.70	3.25
	2_2 敬語	3.81	2.93	2.72	2.99	2.61	2.77
	3_1 V	3.10	2.56	2.51	2.51	2.51	2.72
	3_2 Vv	2.51	3.95	3.71	2.97	3.73	3.14

大学生は「親しみ」「明るい」「丁寧」「優しい」と、どの場面でもポイントの高い印象語が複数ある。社会人若年層も同様にポイントの高い印象語が複数ある場面が多いが、大学生ほどではない。敬語が選択される場面は「丁寧」のみが高いが、それ以外は複数で評価が高くなっている。社会人中年層は、5つの形式のうち4つの形式で「丁寧」という印象語のポイントが最も高く、また「丁寧」のみポイントが高い。なお、選択率に世代差の見られなかった場面3-2について見ると、どの世代でも「楽しい」「親しみ」「明るい」が高いと同じ一致した傾向が見られた。

以上のことから、課題2「その背後にはどのような待遇意識があるか」に対して、中年層は基本的に「丁寧」と感じるものを選択していると考えられることができる。そして、年齢が下がるにつれ、「親しみ」を中心に「明るい」「優しい」など「丁寧」以外の印象も重視されており、特に大学生ではその傾向が強いと言える。ただし、大学生においても「丁寧」が重視されていないわけではない。丁寧のポイントも決して低いわけではないので、「丁寧」であることに加えて「親しみ」「明るい」等他の価値観も重視されているということである。このように待遇的に好ましいと考えるものが年齢によって異なっている可能性があることを指摘した。

5. 考察

ここまでの結果を踏まえ、待遇意識の変化について考察する。調査の結果、年齢層によって表現選択の傾向が異なることが示された。若者には「親しみ」をはじめとする、親近感を覚える表現が好印象であり、近接化ストラテジーの1つとして補助動詞を用いている。一方で、社会人中年層には敬語が可能であれば敬語が選択されており、日本語での伝統的な配慮言語行動

が好まれている。

年齢の高い層に使用されていて、若い世代で使用されない表現がある場合、その表現は将来的に使われなくなっていくことが予想されるが、敬語のような社会的な規範に関わるものの場合、社会人になってから習得されるため、若い世代で使われなくても、そのまま使われなくなるということが見られないという。これを井上（2015）他では「成人後採用」とし、敬語はその習得・採用が成人後になることを指摘している。本稿で考察の対象とした、補助動詞の多用にも成人後採用が関わっているのであれば、大学生が敬語ではなく補助動詞を選択した場面で、将来的には補助動詞でなく敬語を用いるようになると考えられるが、果たしてそうなるだろうか。

敬語を中心とした「丁寧」な表現は、距離を取ることで相手に対する「配慮」を表すものであり、親しみの要素を排除する性質を本来的に持っている。敬語の印象評価を見ても、敬語は「丁寧」だけが高く、「親しみ」は重視されていない。一方で、補助動詞はそもそも話し手が事態をどのように捉えているかを含んで表現する立場志向¹⁶的な表現である。話し手と、聞き手や事態との関係を表現に含むものであり、距離を置いて丁寧さを表す敬語とは相反する志向性である。本調査では大学生は敬語が使えない場面でも、補助動詞を積極的に用いていたが、これが調査2の印象調査の結果に示されたように親近感を重要視する志向性に基づいたものとする、ここでの大学生の補助動詞の使用は敬語を回避した結果とは考えにくい。山本（2016）では印象を記述式でも調査しているが、そこで補助動詞を選択した回答から、補助動詞使用の背後にどのような意識があるかを確認する。

まず、敬語が選択肢にない場面のうち、補助動詞の選択率に年齢差がもっとも大きかった場面3-1を取り上げる。場面3-1の「(具を載せて) いく」では、大学生には次のような「一緒に作る感じがする」という記述回答が目立った¹⁷。

- ・一緒に作っている感覚を味合わせてくれる。
- ・一緒に楽しく作れそう。親密な感じがする。
- ・進行を共にする感じがする。

回答からはこのように親近感を重視していることが顕著である。

また、敬語が使用できる場面では補助動詞を選択した理由として「敬語」と比較した記述も見られた。ここでは場面1で補助動詞を選択した記述回答から、「動詞のみ」や「敬語」と比較して補助動詞について記述した回答を抜粋する。

- ・補助動詞は固すぎず、ゆるすぎない。
- ・補助動詞が「動詞のみ」や「敬語」よりも丁寧で親身な印象がある。
- ・敬語だと固すぎてガソリンスタンドの会話としては不適切。

- ・元気があって堅苦しくない。
- ・現代だと敬語よりこの表現（補助動詞）の方が伝わりやすい。

これらの記述からは、敬語は堅苦しいという印象が強く、それと比較して補助動詞を適切と感じている様子が窺える。このように大学生の補助動詞の使用は敬語を使えないからというよりも、むしろ積極的な使用であり、将来的にもそのまま使用が継続されることも十分に考えられる。少なくとも敬語が使えない場合に、「動詞のみ」よりも補助動詞を用いる傾向は、今度も続くのではないだろうか。場面3-1のような「いく」が今後、どのように使用されるか注目したい。

本稿での調査は、選択肢を単純化するため、動詞・敬語・補助動詞の3つの選択肢を設けた。しかし実際には敬語は一通りではなくいくつか形式があり、また補助動詞の敬語形も見られる。調査の際にもどの形式も選択せず、「その他」として「行っていただく」と補助動詞の敬語形を書いた回答者もいた。「補助動詞+敬語」の形式であれば、社会人に重視される敬語の使用も同時に満たすことになる。よって「親近感+丁寧」が実現できる形式として、補助動詞の敬語形がより頻用される可能性も高いのではないかと考えられる。

また、選択傾向に年齢による相違がない場面も見られたことも重要である。場面2-1、場面3-2では選択傾向に年齢による差は見られなかった。場面3-2の「ちゃう」については、どの年齢層でも同じ選択傾向（選択率）であった。また、場面2-1の「（ドライバーの風を当てて）あげる」は、年齢が若いほど補助動詞「あげる」の選択率が高く、逆に年齢が高いほど「動詞のみ（ここでは「当てる）」の選択率が高かったが、有意な差ではなかった。調査2で社会人中年層においても補助動詞の好感度は高いことが示されたことから、これらでは補助動詞が一定、受け入れられていると考えられる。

このように、補助動詞は敬語に代わって、あるいは敬語と共に今後さらにその一般化していくと考えられることを述べた。

6. おわりに

本稿では待遇意識の変化の方向性を明確にするため、社会人に対して調査をおこない、結果を大学生と比較した。その結果、年齢が高い層では、大学生と異なる選択傾向があることを示した。はじめに述べたように先行研究では、敬語を含む待遇表現が上下による使い分けから親疎による使い分けへと変化していると言われている。本稿の調査結果はこの傾向を支持するものであった。井上（2017）は「敬語に頼らず、談話全体で相手との関係を調整する傾向」ように変化している中で、敬語の形も変化しつつあることを指摘しているが、本稿では補助動詞の多用もその方策の1つに含まれると考えられることを論じた。

ただし、以下の点では、不十分であった。まず、本稿で調査できた社会人の被験者数は、大学生に比べ限られた人数である。また先行研究では社会人では職業によって表現選択傾向には

相違が見られることも指摘されている（柳村 2017）。したがって、より多く、広く調査をおこない、結果を検証する必要がある。また、本稿では選択式で調査をおこなったが、実際にどのような表現が用いられているか、別の方式での調査も必要であろう。調査2の印象調査も選択式でおこなったが、記述式で調査できれば、表現の背後にある意識をより明確にできたと思う。今後もさらなる調査をおこない、結果の検証および補助動詞の多用の動機付け及び変化の進む方向を検討したい。

付記

本稿は、言語科学会第19回国際年次大会（2017.7.1-2 於京都女子大学）でのポスター発表の内容を増補・改訂したものです。発表会場において貴重なご意見をくださったみなさまに感謝申し上げます。

注

- 1) 山本（2016）では302名に調査をしているが、そのうち202名は調査2を選択式でなく、記述式で回答している。本稿では、社会人の回答者と同様の内容の調査の被験者である100名の回答を分析の対象とするが、考察において必要に応じて記述回答を参照する。
- 2) 社会人中年層の一部については、匿名性を確保した上でweb上での実施とした。
- 3) 印象評価の方法は「ノダ」の有無による印象の相違を調査した京野(2014)を参考にした。
- 4) 表現の選択肢としては2つあるいは3つとしたが、「その他」として、選択肢の表現以外が適切だと判断した場合は、欄外に記述してもらった。
- 5) 補助動詞「いく」には時間的な用法のほか、空間的な用法、心理的な用法があるが、ここでは時間的な用法のみを取り上げている。
- 6) 近藤・姫野（2012）ではこの用法では「ちゃう」と「しまう」で意味が異なり、「しまおう」は完了を表すが、「ちゃう」は「完了」ではなく、その事態が生じたことに焦点がある（近藤・姫野は「開始限界」としている）とされており、筆者とは見解が異なる。「完了」との意味のつながりには更なる検討の必要がある。
- 7) js-STAR は <http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>で公開されている、フリーの統計ツールである。
- 8) $\chi(2) = 22.608, p < .01$
ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、「動詞のみ」の選択率が補助動詞および敬語よりも有意に低かった。
- 9) $\chi^2(2) = 24.790, p < .01$ ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、「動詞のみ」の選択率が補助動詞および敬語よりも有意に高かった。

- 10) 検定の結果は以下の通りであった。
場面 2-1 $p=0.0012$ ** ($p<.01$)、
場面 3-1 $p=2.0000$ ** ($p<.01$)
場面 3-2 $p=0.0334$ * ($p<.05$)
- 11) 場面 1 $\chi^2(2)=2.000$, ns 場面 2-2 $\chi^2(2)=3.125$, ns
- 12) 検定の結果は以下の通りであった。
場面 2-1 $p=0.8036$ ns ($.10<p$)
場面 3-1 $p=0.0213$ * ($p<.05$)
場面 3-2 $p=0.4545$ ns ($.10<p$)
- 13) 場面 1 は $\chi^2(2)=19.933$, $p<.01$ 場面 2-1 は $\chi^2(2)=7.786$, $p<.05$ といずれも有意な違いが認められた。また、ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、いずれも敬語の選択率が有意に高かった。
- 14) 場面 2-1 は $p=0.9999$ ns ($.10<p$) 場面 3-1 は $p=0.4583$ ns ($.10<p$)、場面 3-2 は $p=0.5716$ ns ($.10<p$)と、いずれも有意な差は認められなかった。
- 15) 水谷 (1985) は日本語母語話者にはある事実について自分の立場から表現する志向性を「立場志向性」としている。またこれは同じ事実についてそのまま事実として表現する「事実志向」と対比的に捉えられている。
- 16) 調査では選択肢には「敬語」や「補助動詞」と明示していないので、回答では「1より2の方が・・・」という書き方であったが、ここでは相当する表現を入れて示す。
- 17) ここで「作っていく」についての 59 の回答のうち、36 の回答に「親しみやすい」「一緒に作っている感じがする」という内容が記述されていた。

引用文献

1. 池上嘉彦・守屋三千代編著(2009).『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房.
2. 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000).『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
3. 近藤安月子・姫野伴子編(2012).『日本語文法の論点 43』研究社.
4. 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり・王安(2010).「中国語母語日本語学習者の事態把握—日本語主専攻学習者を対象とする調査の結果から—」JCLA2010, pp.690-706.日本認知言語学会.
5. 井上史雄・金順任・松田謙次郎(2012).「岡崎 100 年間の「ていただく」の増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化」『国立国語研究所論集』4,pp.1-25. 国立国語研究所.
6. 井上史雄(2015).「日本語の 大規模経年調査に関する総合的研究 敬語の成人後 採用 : 岡崎敬語調査の『川の字』変化」『国立国語研究所プロジェクトレビュー』5-3,pp.98-107.国

立国語研究所.

7. 井上史雄(2017).『新・敬語論 なぜ「乱れる」のか』NHK 出版新書.
8. 京野千穂(2014).「対話における文末の非ノダ文・ノダ文が示す話者の伝達態度—日本語母語話者印象評定の量的調査から」『社会言語科学』17-1,pp.114-127.社会言語科学会.
9. 水谷信子(1985).『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版.
10. 水谷信子(2015).『感じのよい英語 感じのよい日本語 日英比較コミュニケーションの文法』.くろしお出版.
11. 柳村裕(2014).「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因—岡崎敬語調査から—」『国立国語研究所論集』8, pp.177-196.国立国語研究所.
12. 柳村裕(2017).「話者の職業による敬語使用の差異と変化：岡崎敬語調査資料の分布」『国立国語研究所論集』12,pp.205-225. 国立国語研究所.
13. 山本裕子・西川寛之・水谷信子・押尾和美(2013)「『感じのよい表現』と補助動詞—日本語母語話者と非母語話者を比較して—」国際 OPI シンポジウム予稿集.
(<http://opi2013.proficiency.jp/wp-content/uploads/2013/10/071.pdf>)
14. 山本裕子(2015).「感じのよさと補助動詞—日本語母語話者と非母語話者の調査結果を比較して—」『人文学部研究論集』第34号,pp.1-18. 中部大学人文学部.
15. 山本裕子(2016).「補助動詞の多用と横志向—接客場面を中心に—」『社会言語科学会第38回大会予稿集』pp.46-49.社会言語科学会.
16. 山本裕子(2017).「補助動詞の多用に見られる『横志向』—年齢差に注目して—」『JSL2017』pp.202-203. 言語科学会.